

感性のデータ化(2)

テンポ変化(その1)

文章は文字の羅列のようですが、意味や品詞や句読点などでフレーズに分けられます。この「文節」や「段落」と呼ばれるものが言葉の理解には不可欠のように、音楽も適切な場所でフレーズに区切られています。

ラップ音楽のように殆ど句読点のない言葉のための音楽はむしろ休止や停止を排除しその連続性を楽しんで居るわけですが、小泉総理の演説のように「澁み過ぎる」「最初に必ずアクセントが来る」「早口の後で必ず長い沈黙を入れる」というような本来の演説の中身と関係のない話し方の癖も不自然なものです。

嘶家の絶妙な語りには必ず絶妙な「間」の取り方と「早口」と「ゆっくり」の組み合わせがあります。コンピュータの読み上げソフトの多くは最近でこそイントネーションやアクセントに変化を持たせていますが、読み上げ速度は一定です。パーカッションが曲全体のリズム感を盛り上げている今時の音楽は、一定速度でなければなりません。ヒット曲を紹介するのに「軽快なリズムの・・・」とかは言いますが「軽快なメロディの・・・」とか「軽快な歌詞の・・・」はあまり言いません。この「軽快な」を支えているのは殆どの場合パーカッションのリズムパターンです。しかし、クラシックの場合パーカッションに支えられなくても軽快なテンポとか軽快なリズムの旋律は存在します。



多くの場合テンポの変化は上図のように【沈黙→昂奮】の情動を喚起します。その場合の一般的法則は沈黙＝低速、昂奮＝高速であることはすでに知られています。人は昂奮すると早口になり、落ち着くとゆっくり話します。小泉総理は昂奮を押さえるために早口の後、一呼吸を入れているのかも知れません。

この低速でも無い、高速でもないテンポの事を「モデラート」と呼んでいるわけですが、音楽的にはモデラートには感情が無いのかも知れません。多くのDTMの授業では「モデラート」に設定されたデフォルトのテンポのまま授業が進められます。従ってその様な授業では本来必ずテンポを変更したり編集したり工夫しなければなりません。しかし、多くの教材は一定のテンポ(しかもモデラート)が多いのに驚かされます。一体「感情を込めて」演奏するにはどんなテンポが相応しいのでしょうか。「無感情であることも感情であ

る」とでも言うのなら別として、【沈黙←Moderato→昂奮】の動き即ち情動は必ず言葉や音楽には不可欠なものです。

●エントロピーによる変化

言葉に句読点があるように、音楽にも句読点のようなものがあります。旋律のまとまりや和声のまとまり、モティーフのまとまり、小楽節、大楽節などのまとまりにはそれぞれ開始と終止があります。作曲家の保科洋氏はそのまとまりをエネルギー理論で説明されています。車の発車時には定速走行時より大きな【加速エネルギー】が必要です。この加速エネルギーが感じられるフレーズには当然テンポの加速が起こります。逆に言えばその結果聴き手にはエネルギーが伝わるのです。このような演奏者から聴き手にエネルギーが伝わることを熱力学の言い方を借りて「エントロピーが大きい」と私は考えます。金属棒の一端を加熱すると反対側の端まで熱が伝わることをエントロピーという言葉で説明しているのですが、演奏者の思いが高い方から低い方へ伝わるのでこの言葉を借りて言っています。このエントロピーが小さくなると冷めて行くわけですから、当然テンポは遅くなります。この【減速エネルギー】は聴き手の方から放出される「負のエントロピー」というわけです。

曲全体の中のそれぞれのフレーズごとの「温度差」からエントロピーを計算して、それに応じたテンポ変化をイメージします。例えば → → のような和声進行はその後 → へ落ち着こうとする動きが当然有るわけですから、【落ち着く】＝【エネルギーの放出】という、終わりに向けての【加速→減速】というテンポ変化を潜在的に持っています。また上昇音程を伴う動きは同様に加速エネルギーを持っていますので下降音程よりテンポは速めになります。また句読点のような切れ目の1～2拍前から急速な減速を伴うことはよくあります。作曲家はしばしばそのような場所に【rit.】を書き込んでいます。当然次のフレーズの頭が加速点になる場合はそこに【a temp】を書いてありますが【rit.】の後で十分な【エネルギーの放出】を必要とする【間】があるのが普通です。小泉総理の場合は加速の後、減速しないで突然急ブレーキで停止するようなぎくしゃくした走りをイメージしますが、そんな音楽も無いわけではありませんので、ここでは原則として自然なエネルギーの移動原理に従うイメージで説明しました。いずれにせよ【変化】には急激なものと緩やかなものがあり、それぞれのエネルギー変化には大きな違いがあります。